

此香一通り終り残る廿包の内、又五包炷て二度も聞事有べし、一座のはからいによるべし、香  
 圖亂りにし、久敷留てあ、名乗紙出香の付様口傳も有り、

一 記録、端書出香の圖卷の名、名乗下に聞香の圖卷の名書也、圖をみて知べし、圖印あるには、印聞にて押用、

一點の事、功者へ尋ねて吟味をとげて後記録に寫べし、卒爾に極れば相違の事有、源氏は點殊に

むつかし、傍正の習いも有となん、圖有ば執筆も擇ぶべし、

一案るに、源氏香は古代の系圖より出て、猶ほ優美なり、圖も卷頭の桐壺と卷軸の夢浮橋を除き、

雲隱をぬき、玄かも若菜には上下を出し、自然にして五々の圖にあい、聞にして彼物語の趣意

にかなふ、實に言語道斷といふべし、

〔十種香暗部山〕源氏香之圖

はいき	うつせみ	夕がほ	わか菜	末つむ花	紅葉の賀	花の宴	あふひ	さか木
花ちる里	すま	あかし	みをつくし	蓬生	關屋	繪合	松かぜ	うす雲
朝がほ	なとめ	玉かつら	初れ	胡蝶	ほたる	とこ夏	かやりび	野分
								
								
								